

第Ⅳ部門

昼夜間の色彩変化が歩行者のイメージに与える影響

大阪工業大学工学部 学生会員 ○竹内 修人

大阪工業大学工学部 石田 和起

大阪工業大学工学部 福井 涼平

大阪工業大学工学部 正 会 員 田中 一成

大阪工業大学工学部 正 会 員 吉川 眞

1. はじめに

現代の日本の都市は、住宅地や商業地、業務地等の、街路景観によって構成されている。近年、景観に配慮したデザインや自然景観や歴史的景観に配慮した街づくりの意識が高まりつつある。日本では 2004 年 6 月に景観法が成立し、2005 年に全面施行された。これにより、景観形成の取り組みがなされている。

景観を考慮した都市を計画する上で重要なことは、現状の良好な点や課題を把握することである。景観地区の形態意匠等におけるには制限が設けられていることが多い。しかし、色彩については、その多様さから統一した基準を定めることが難しい。そのため、景観計画をおこなう際、色彩についての裁量はその市町村が判断することになっている。しかし、色彩について定量的な基準を設けることは非常に困難である。そこで我々は、都市における街路景観の定量的な基準を定め、良好な景観を得るためには現状の詳細な把握を行うことが重要であると考えた。

2. 研究の目的と方法

本研究は、地区の性格によって異なると考えられる時間と色彩に着目する。本研究の目的は、都市の昼夜の街路景観を対象として、街路景観のイメージに影響を及ぼす要因を明らかにすることである。また、歩行者が注視する対象は街路のイメージを構成する上で大きな要因となると考えられるため、歩行者が注視する街路の空間構成要素と街路のイメージの関係を明らかにする。

研究方法は、昼と夜に道路の中心から街路を撮影した。写真を用いて、アンケート調査を実施する。アンケート調査には、SD 法、注視点マークを用いる。最後に、アンケート調査の結果から得られた注目点と画像分析により抽出した色差、空間構成要素を比較する。

3. 対象地

本研究では、予備調査の対象地として大阪市北区茶屋町を選定した(図1)。茶屋町は元々、西成郡北野村の一部であり、阪急電車・梅田駅ホームの高架の東側に広がる地区である。また本調査においては、大阪市中央区にあるアメリカ村を対象地とした。1970 年代空いていた倉庫や駐車場など家賃の安い物件を利用して、現在のアメリカ村のショップの原点が形成された。当時、日本で貴重だった本場アメリカのアイテムが話題となり、多くの若者たちで賑わいだした。2000 年代は、インターネットの普及により、より広く詳しく知られるようになった。大阪駅や心斎橋駅に近く、多くの人が行き交い、多様な性格の地区が混在するとともに、さまざまな空間構成要素がある地区といえる。

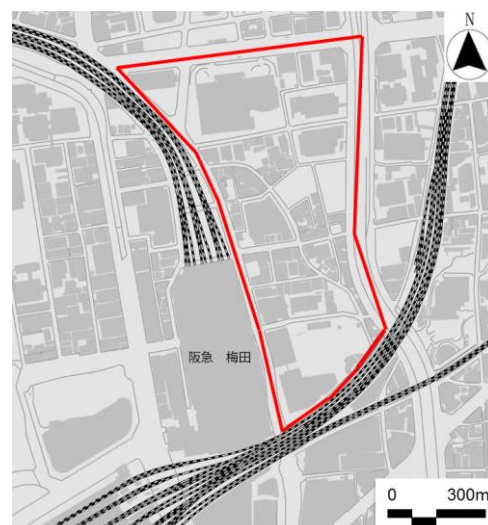


図1 茶屋町

4. アンケート調査及び分析

アンケート調査は2015年9月1日（予備調査）および2015年11月3～7日（本調査）に調査した。その結果について、SD法により心理量分析をおこなった。因子分析の結果と、画像分析により得られた注目点と色差、空間構成要素、街路の印象との関係を比較する。

また、アンケート結果をプロフィールにして、昼夜ごと、または因子ごとに比較する。アンケートに使用した画像を用いて色差を抽出する。

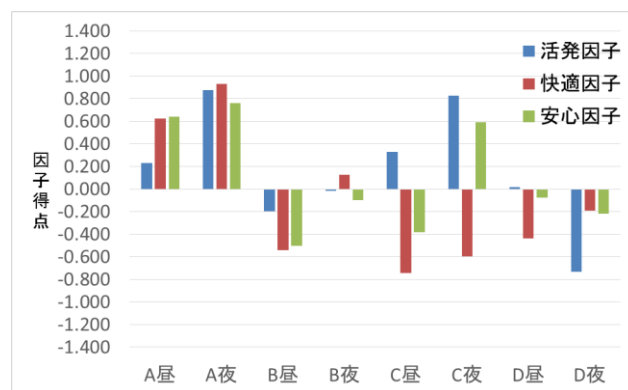


図2 因子得点

5. 結果・考察

因子分析の結果から、活発因子、快適因子、安心因子を抽出した。これら3つの因子得点特徴的な街路を抜き出し、因子ごとに注目点、色差と比較しその関係を考察した。

活発因子に影響していると考えられる注視要素として、看板、店舗光、あふれだしが共通して注視されている。また、活発因子得点の高い街路は人通りが多い街路である。つまり、活発因子には、雑多さや人通りの多さが大きく影響していると考えられる。

快適因子得点が昼夜を通して高かった場所は全て街路樹が並木である。また、夜は快適因子が高くなりやすいことを把握している。つまり、快適因子には街路樹などの緑や街路の単調さ、建物外壁の色などの色の統一感が大きく影響していると考えられる。そのため、色が多く見られる街路は快適因子が下がる傾向が見られた。

安心因子と関係する街路は、他の因子よりも昼夜の変化が大きい街路があることから、安心因子には、光が影響していると推測される。つまり、街路に暗い印象があると、安心因子得点が低い値を取りやすいといえる。

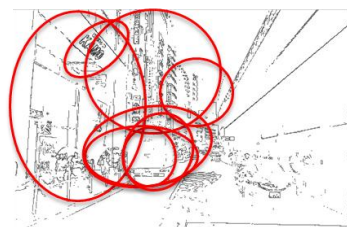


図3 活発因子



図4 快適因子



図5 安心因子

6. おわりに

本研究では街路景観を対象として、街路景観のイメージに影響を及ぼす要因を具体的に明らかにすることができた。今後は、ヴィスタ景観だけでファサード方向から街路景観を分析していく。最終的には色差による景観評価に結びつけることであれば、景観計画の指標として利用できるのではと考えている。